
愛する君に銃口を

からたちかなめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛する君に銃口を

【Nコード】

N2173B

【作者名】

からたちかなめ

【あらすじ】

漆黒の髪に金色の瞳を持つ自称宣教師ラグナ。彼の教えを聞いた人々は口を揃えてこう言った。『あれは人の皮を被った悪魔だ』と。ヘビースモーカーの上に腰には常に銀色に輝く装飾銃口を携えた非常識宣教師が繰り広げる異世界布教活動記。

00：始まりは月明かりの下で

暗闇の中、天井近くにある小さな窓からは僅かな月の光が差し込んでくる。

石造りのその部屋はまるで囚人の為の部屋のように中の者が外に出られないよう頑丈な鉄格子で塞がれていた。

そんな部屋に備え付けられたベッドと呼ぶには余りに簡素な台に横になっていた男は体中を感じ鈍い痛みで顔をしかめた。此処に連れて来られる時に殴られた後頭部は見事に腫れて立派なタンコブになっていた。

男は闇に溶けてしまいそんな黒髪をくしゃと掻き揚げ金の瞳を悔しげに細めた。

さて、どうしたものか。

先日より背後に複数の嫌な気を感じ注意はしていたがまさか男でしかも成人している人間を誘拐するなど考えもしなかった。

犯人の検討はつく。

大方サラマンド社絡みだろう。

そんなことを考えつつどうやってこの鉄格子から逃れるかを考える。何時までもこんな埃っぽい場所に居てやる義理はまったくくない。

その時自分がある独房の直ぐ近くで見回りの者の足音が聞こえた。

これを利用しない手はないな。

男はニヤリと口の端を上げた。

01：始まりの前のプレリユード

薄く雲の掛かった満月の下

街灯の明かりすらない田舎の道を闇色のコートに身を包んだ一人の男が歩いていた。

傍から見えるのは男の口に咥えられた煙草の小さな明かりと空から降り注ぐ冷たい月明かりのみ。

背に瀬を割れた大きな鉄製の箱には頑丈な鎖が何十にも巻き付けられている。

男の名前はラグナ・エンカルト。

漆黒の髪に金色の瞳を持つ自称宣教師。

そんな彼の仕事は・・・殺し屋さん。

「まったく、アンタって反省するって言葉の意味理解できてる？」

「さあ、俺って過去は顧みない主義だから。・・・所でレーナ、飯はまだ？」

「…アンタそのうち死んでも知らないからね。はい、どーぞ。」

はあ、とため息を付き目の前のカウンターに座る男にできたてのパスタを差し出した。

今日もこの男は体中に傷を作ってやってきた。

しかし当の本人は全く気にせず両手にはめられた手袋すらはずさず湯気を立てているパスタにがつついていた。

男の名前はラグナ。

一年ほど前からこの小さな村にちよくちよく顔を出すようになった自称宣教師。

だか私も村の人も一度たりとも彼が布教活動をしているところを見たことがない。

まあ、なんだか訳在りらしいので深く聞くことはしないで放って置いているけれど。

ラグナとの出会いは突然で痛烈だった。

下手したら死んでしまいかもしれないぐらい危なくて衝撃的な出会いだった。

あの日は太陽がストライキを起こしたんじゃないかと思うほど薄暗くて、昼間にも関わらず殿家でも照明を灯しているような日だった。そんな日に何を思ったのか私は外に出た。

そして出会った。

目の前には大きな鉄の箱と黒い塊。

地面にはありえないくらい鮮やかな赤い水溜り。

死んでるのかと思ったから私は慌てて黒い塊に近づいた。

「・・・ちよつと？生きてます・・・？すごい怪我・・・」

私が声を掛けるとその黒い塊はもぞもぞと動き出し私の肩に手を掛け小さな声で呟いた。

「
」

「え？聞こえない……。何て？」

「……。ろ……。掴つてろ。」

「は？」

男が言った意味が分からずキョトンとしていると前方がありえないぐらいに明るくなった。

眩しくて眼をつぶっているとふわりと私の体が軽く中に浮かぶのを感じた。

「はいっ！？きゃ……。ちょ何ーーーーっ！？」

「喋るなっ舌噛むぞ！？」

「はっ、大怪我人がそんな村娘助けてる余裕あるのか？人の心配する前にてめえの心配したほうがいいんじゃないの？」

浮遊感がなくなり薄く眼を開けると私は黒ずくめの男の腕の中にいた。

後ろを振り返って先ほどまで私達が居た場所を見るとさっと血の気が引くのを感じた。

そこには大きな穴がぽっかりと開いていた。

全身から冷や汗がどっと吹き出し心臓が五月蠅いぐらいにバクバク言っているのが分かる。

そんな私の様子に気がついたのか男は私の顔をみて薄く笑った。

「悪い、巻き込んだしまった。たぶん直ぐ終わるから。」

そういうと男は怪我をしているのが嘘のようにすんなり立ち上がる
と巨大な鉄製の筒（閃光筒）を持っている男と対峙した。

先ほどの眩しい光の原因はあれか、と思ったのと同時に一つ疑問が
浮かぶ。

あの黒ずくめの男は何で狙われているんだろう・・・。

そんなことを考えている間にも2人は動き出し黒ずくめの男は腰に
差してあった銀色の銃を抜いた。

「閃光筒相手に拳銃一丁かよ。舐めるのも大概にしなっ！」

「さつきから良く喋る奴だな。弱い犬ほど良く吠えるとはよく言っ
たものだ。」

「てめえっ！！跡形も無く消し飛ばしてやるっっ！！」

黒ずくめの男の言葉に血が上った男はそのまま引き金を引いた。

大きな光の弾が黒い男に向かって近づいてくる。

私は怖くなり目をつぶったので実際の所何があつたのか良くわから
にけれど、一発の銃声が鳴ったと同時に眼を開けると硝煙を上げて
いる拳銃を持った黒い男と力尽きて倒れている先ほどまで閃光筒を
持っていた男が視界に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2173b/>

愛する君に銃口を

2010年10月10日05時03分発行